

令和三年度新宿区夏目漱石コンクール わたしの漱石、わたしの一行

中学生の部 最優秀賞

不安定な正しき

九段中等教育学校 3年 海老原 朱里

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行 履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切です。

これは赤シャツとの一件後、辞表を出した山嵐を追って校長に辞表を提出したときに坊っちゃんと言った言葉だ。この言葉をそのままに捉えると、カッコいいと思うかもしれない。自分の損など考えず、ただ一緒に戦ってくれた山嵐への義理を大切にしている。私もカッコいいという理由だけでこの一行を選んだ。そして私なりにこの言葉を考えてみたのだ。しかし、考えれば考えるほどこの美しい言葉は、形を崩し全く別の意味に変貌してしまった。まず義理という曖昧なイメージのものに明確な意味をつけてみた。この義理が辞書の通りなら人間のふみ行うべき正しい道という意味になる。ならば、坊っちゃんは正しい道を突き進むために、自分の履歴も生活もかえりみず辞職したのである。ただ、それは学校の迷惑を考えず強行突破した道ではないかと私は思った。それは誰もが認める正しい道か、義理なのか、そう考えずにはいられなかった。作中坊っちゃんは人に褒められるようなことをしているのか。その矛盾に気が付いたとき、私は漱石の考えに触れたような気がした。坊っちゃんかと言っているのか。その矛盾に気が付いたとき、私は漱石の考えに触れたような気がした。坊っちゃんが言った義理に隠れた本当の意味は感情だと私は思う。人として正しいことではなく、自分が正しいと思うことを守ったのが坊っちゃんなのだ。坊っちゃんの生き方はカッコいいはずなのに、心からカッコいい人物だと言えないのはそこからきているのかもしれない。この作品は一人称視点だからあまり感じなかったが、坊っちゃんの考え方は矛盾していると今は思う。坊っちゃんが貫きたかったのは道理でも義理でもない、自身の感情だ。ところが、彼は自分に足りないところがあることを知りながら、自分の信条だけは間違っていないと信じて疑わなかった。個人的な感情を人間の正しい道だといえるだろうか。漱石が坊っちゃんを書くうえで考えたのは、美しい言葉の曖昧さと共存の社会における個人の感情を貫くことの不安定さではないか。理性と感情の感情だけを取ったような坊っちゃんはその他大勢の考えより自分の考えのほうが正しいと思っている。その根本には「義理」や「理屈」のような正しいとされる美しい言葉があったから。正しきは一人一人の考え次第でその形は変化してしまうのに。そしてその正しきを周りが必ず受け入れてくれるとは限らない。だから、坊っちゃんの周りは常に変動していて不安定だ。

この作品は正しい人間が損をしてしまうような社会を風刺しているのかと思っていた。しかしたった一行の文章を深く考えることで新しい視点を持つことができた。私はこの作品を読んで、正しさほど不確定で曖昧なものはないと強く思った。それでも自分の中の正しさと出会えたとき、また坊っちゃんを読みたいと思う。そうして坊っちゃんの正しさについてまた新しい視点が持てることを楽しみにしよう。